

event-finished/page/4 (2019年12月5日閲覧)  
 西海国立公園九十九島動物園森きらら (2019a) 九十九島動物園 森きららについて. [https://www.morikirara.jp/?page\\_id=58](https://www.morikirara.jp/?page_id=58) (2019年12月5日閲覧)  
 西海国立公園九十九島動物園森きらら (2019b) ライオン「アサヒ」の誕生会. [https://www.morikirara.jp/?post\\_type=event&p=9007](https://www.morikirara.jp/?post_type=event&p=9007) (2019年12月5日閲覧)  
 佐世保市 (2019) 西海国立公園九十九島動物園. <https://www.city.sasebo.lg.jp/benrimap/shisetsu/kan-ko/052.html> (2019年12月5日閲覧)  
 市民ZOOネットワーク (2019) 「エンリッチメント大賞2019」—多様な方向から動物たちの豊かな暮らしを実現—. <http://www.zoo-net.org/enrichment/award/2019/> (2019年12月25日閲覧)  
 Skibieli, A. L., Trevino, H. S. & Naugher, K. (2007) Comparison of several types of enrichment for captive felids. *Zoo Biol.*, 26: 371–381.  
 Stark, B. (2005) The use of carcass feeding to enhance animal welfare. In: Clum, N., Silver, S., Tomas, P. (Eds.), *Proceedings of Seventh International Conference on Environmental Enrichment*. Wildlife Conservation Society, New York, pp. 198–204.  
 Szokalski, M. S., Litchfield, A. A. & Foster, W. K. (2012) Enrichment for captive tiger (*Panthera tigris*): current knowledge and future direction. *Appl. Anim. Behav. Sci.*, 139: 1–9.  
 Takatsuki, S. (2009) Effects of sika deer on vegetation in Japan: a review. *Biol. Conserv.*, 142(9): 1922–1929.



細谷忠嗣 ほそや ただつぐ

九州大学持続可能な社会のための決断科学センター准教授 環境モジュール  
 Wild meat Zoo 代表

専門は昆虫学（主にコガネムシ上科甲虫の生物地理に関する研究）。現在、獣害問題に関連する研究もおこなっている。



御田成顕 おんだ なりあき

九州大学持続可能な社会のための決断科学センター 講師 環境モジュール

専門は森林政策学（主に森林犯罪に関する研究）。



中原祥貴 なかはら よしき

西海国立公園九十九島動物園森きらら 水族館事業部  
 コンサルティング事業室チーフ



高尾久美子 たかお くみこ

西海国立公園九十九島動物園森きらら 動物園事業部  
 動物園企画課 ライオン・チーター担当

## 研究ノート

# 学生・伊波普猷が捉えた人間とアリの社会 (その1)

竹内太郎

九州大学大学院地球社会統合科学府博士後期課程

村上貴弘

九州大学持続可能な社会のための決断科学センター

## 1 はじめに（竹内）

この研究ノートは、近代沖縄の学界をリードし、その成果の多岐に渡ることから、後に「沖縄学の父」と呼ばれるようになった伊波普猷が、1905年の東京帝大時代に『琉球新報』に寄稿した「閑月日」と呼ばれる小文について論じるものである。

近代日本の民衆思想史研究の大家である鹿野政直は、「みずからをボーリングすることの深い思想」と伊波の思想を形容し、「こんなにもひだの深く多い文脈を、近代日本はほとんどもつことがなかった」と独自の表現で捉えたように、あらゆる学問や思想を吸収し、自身の沖縄研究の糧とした<sup>1</sup>。

伊波の『古琉球』という著書は、現在も研究者の間で読まれ続け、『おもしろさうし』研究の先駆けとなった伊波に関する研究は、歴史学、民俗学、言語学、政治学など、これまでにあらゆる方面から優れた研究がされてき

1 鹿野政直「F.Ifaのことなど」『新沖縄文学』38号]

た。伊波の生涯に沿いながら、その人間像や思想に言及する研究書もあった。

しかし、伊波が研究者として出発する前の、いわゆる大学生の時代に細かく触れた研究はほとんどなかった。2010年から2014年にかけて『琉球新報』上で連載された、「沖繩と日本の間で 伊波普猷・帝大卒論への道<sup>3</sup>」という伊佐眞一の仕事によって、これまで描かれてこなかった伊波像に光が当たった。

本論で論じる「閑月日」はその時代に書かれたものである。先行研究でも、その表面的な部分しか言及されておらず、触れていない研究書さえもある。今回、この雑誌『決断科学』誌上で、この小文について触れたいと考えたのは、伊波が人間の社会とアリの社会の比較を細かく描いているからである。決断科学センターには、アリの専門家である村上貴弘准教授が在籍している。ここで書かれたアリの生態がどれだけ忠実なのか、またこの時期に伊波普猷がアリの社会に触れていることの意味を、村上氏に触れてほしい。本論が伊波研究に、またアリの研究にどのような影響をもたらすかは、未だ未知数だが、決断科学センターならではの仕事ということで、たたき台のようなものとして取り扱って頂けたら幸いである。

本論は、まず伊波の「閑月日」に書かれた内容とその時代背景、思想的特徴に触れて、村上氏にここで描かれたアリの社会について詳述していただく。なお、対象とする文章は【写真1】に全文引用している。

## 2 伊波普猷「閑月日」に見える時代背景と思想史的特徴（竹内）

先に参考として引用した「閑月日」のアリに関する文章の前段階として書かれた一文は「沖繩ほど社会学の研究資料に富んだ所は少いと思ふ<sup>2</sup>」だった。帝大文科大学の学生にとって必修科目だった社会学という講義を受けたであろう伊波がそう感じたのは、「当時の伊波がかかえる問題意識は、げんに彼が身をおく世間の、それこそ雑多な事象を考える際の、その背後もしくは根底に潜むものを読み取る“社会”学の素養をまさに必要と

2 伊波普猷「閑月日」『伊波普猷全集』第10巻 p.37

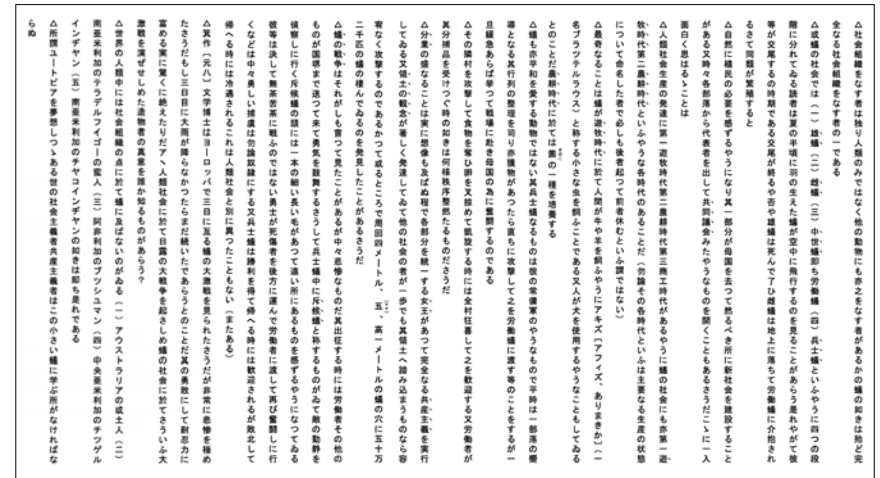


写真1 伊波普猷「閑月日」の該当文章

していた」からだろうと郷土史家の伊佐眞一は分析している。

アリの社会に関する細やかな分析は共著者に譲るが、本節ではこれが書かれた時代背景と思想状況、伊波の問題関心に触れる。

当時伊波が抱えていた最大の問題関心、それは自らのアイデンティティに関わることだった。1879年の琉球処分という、日本帝国が沖繩をその版図に組み込んだ事件とほぼ同時期に生まれた伊波は、『おもろさうし』という沖繩の歌集に描かれた独特の精神世界に没頭し、沖繩の言語や神話、歴史だけでなく人類学にまでその興味の幅を広げていた。伊波が大学で沖繩の言語学を専攻したのも、鹿野政直によれば「選択の対象であるというよりは、運命づけられたもの」で、「そのなかで伊波の特性は、選択が沖繩人としての文化的出自と不可分であったため、語学に終始する域にとどまることができず、文化の考察へと大きくはみだしてゆくこと」だった<sup>4</sup>。

伊波の問題意識は、早速「同類が繁殖すると自然に植民の必要を感ずるやうになり其一部分が母国を去つて然るべき所に新社会を建設することが

3 伊佐眞一『沖繩と日本の間で 伊波普猷・帝大卒論への道』(下) p.39

4 鹿野政直『沖繩の淵 伊波普猷とその時代』pp.35～36

ある<sup>5</sup>という文章に表れている。ここで「植民」という言葉に傍点を付したことは、沖縄人の出自の問題と深く関わることだったからである。伊波は大学での言語学研究の結果だけではなく、坪井正五郎や鳥居龍蔵<sup>6</sup>といった人類学者の言説も大いに取り入れ日琉同祖論を体系化していった。その成果はあらゆる著作における文章に表れたが、「琉球史の趨勢」(1911年)では、「今日の沖縄人ハ紀元前に九州の一部から南島に植民した者の子孫であるといふ事丈を承知して貰ひたい<sup>7</sup>」と書かれた。

先に引用した「植民の必要」云々の文中にある「母国」とはヤマトを指し、「新社会」は沖縄を暗に意味していることを読み取ることができる。このように、社会性昆虫であるアリの行動と沖縄人の歴史過程を必然的に結びつけて考える思考様式は、帝国の周縁を出自に持つ伊波だからこそのものである。

続いて伊波は、人間とアリの社会の共通点として、発展段階があることを示す。「第一遊牧時代第二農耕時代第三商工時代<sup>8</sup>」と、その発展段階を説明するが、これはドイツの経済学者フリードリヒ・リストの発展段階論、もしくは福沢諭吉の『文明論之概略』に依拠していた。リストの経済発展段階説は、未開状態、牧畜状態、農耕状態、農工状態、農工商状態の五段階に分かれるという説である。福沢諭吉はそれらの発展段階を「文明の齢」と称し、「居に常処なく食に常品な」い狩猟生活を「野蛮」、「農業の道大に開け」ていても「その内実を探れば不足」ある状態を「半開」、「学問の道は虚ならずして発明の基を開き、工商の業は日に盛にして幸福の源を深くし<sup>9</sup>」ている状態を「文明」とした<sup>10</sup>。伊波の説明はリストの経済発展段階説、もしくは福沢の論の一部を当てはめたものだったと考えられる。

5 伊波普猷「閑月日」『伊波普猷全集』第10巻 p.37

6 鳥居に沖縄の人類学調査を進めたのは伊波であった。その際、付きっきりで沖縄を案内した。その内実に関しては、伊佐真一『沖縄と日本の間で 伊波普猷・帝大卒論への道』に詳しい。

7 沖縄とヤマトの祖先は同じだったとする言説。向象賢という琉球王国時代の政治家やB・H・チェンバレンという帝大教授といった人物がそれぞれの観点から唱えたが、伊波普猷はそれらを引き継ぎつつ言語学、歴史、民俗学、人類学の観点を取り入れ日琉同祖論を体系化した人物としても知られている。

8 伊波普猷「琉球史の趨勢」[伊波普猷『古琉球』初版 p.62]

9 伊波普猷「閑月日」『伊波普猷全集』第10巻 p.37

10 福沢諭吉『文明論之概略』p.24

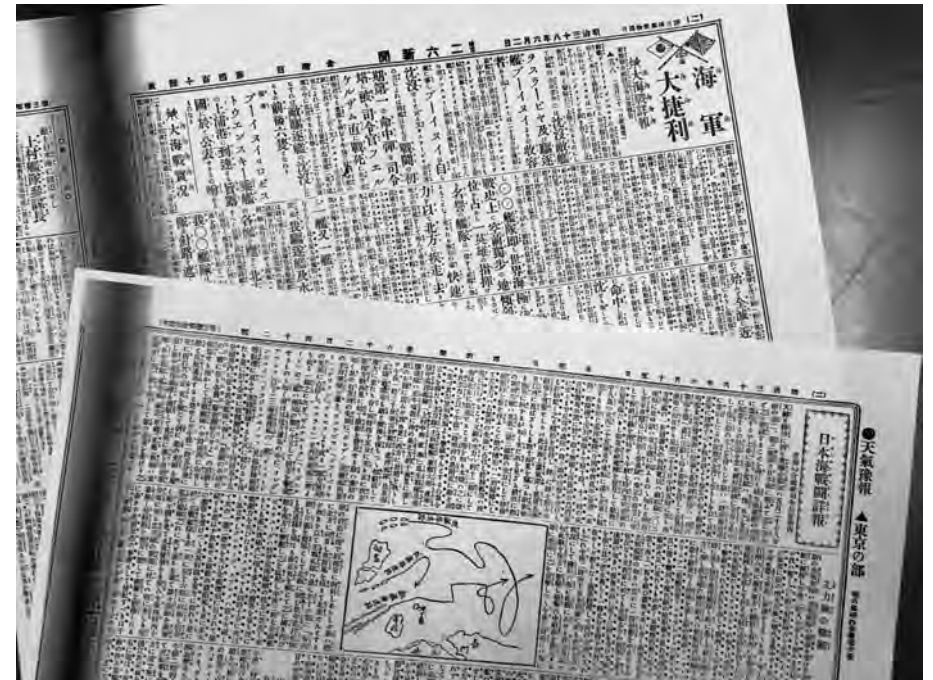


写真2 都内の新聞における日露戦争の戦果の報道

この「閑月日」という小文に横たわる思想史的特徴は大きく分けて三つある。

第一は、この文章が当時の時代背景を映す鏡になっていたこと。これが書かれた1905年6月は、日本海海戦で東郷平八郎率いる連合艦隊がバルチック艦隊を破った直後の時期で、日露戦争は最終局面を迎えていた。日露戦争の状況は、帝都に居を構えていた伊波の耳には日々入ってきていただろう【写真2】。蟻の戦いに言及した上で出た、「ア、人類社会に於て日露の大戦争を起さしめ蟻の社会に於てさういふ大激戦を演ぜしめた造物者の真意を誰か知るものがあらう？」という言葉には、当時の社会状況

を見つめる伊波の想いがこもっている<sup>11</sup>。

日露戦争の状況と合わせて考える必要がある思想史的特徴の第二は、社会主義また共産主義に対する伊波の言葉である。「分業の盛なることは実に想像も及ばぬ程で各部分を統一する女王があつて完全なる共産主義を実行している<sup>12</sup>」という文章の中の、「完全なる共産主義」とは何か。「富の分配」が確実に行われ、資本家（ここでは「女王」か）に搾取されることのない社会のことを指すのだろうか。それとも、労働には必要労働と剰余労働があり、マルクス主義的な「富」とはすなわち剰余労働が生み出す「剰余価値」を指すが、そもそも必要労働のみの社会が完成しているということだろうか。アリの種によって細かい差はあるだろうが、この点は共著者に詳しく聞いてみたいところである。

しかし、伊波が共産主義という言葉にあえて「共産主義」と傍点を付したことの意味を一寸考えておく必要がある。一般的に括弧を見せつつあった共産主義思想とその社会を、人間は未だに完全実現できずにいるにもかかわらず、アリはすでに実現していると伊波は言いたかったのではないだろうか。それゆえ、人間社会の不完全な共産主義と差別化するべく、伊波は「共産主義」と傍点を振った。したがって導き出されたのが、結びの「所謂ユートピアを夢想しつゝある世の社会主義者共産主義者はこの小さい蟻に学ぶ所がなければならぬ」という文章だった。

当時の日本の社会主義及び共産主義を取り巻く環境は、1901年に日本初となる社会民主党が片山潜や幸徳秋水、木下尚江らによって結党され、1903年に日露戦争に対する非戦論者としてキリスト者の内村鑑三や共産主義者の堺利彦、社会主義者の石川三四郎、幸徳秋水が『萬朝報』を退社

11 伊佐眞一は、綿密な史料調査・整理を根拠に、伊波の思想は沖縄とヤマトの間で揺れながらも、ヤマトを撃つ思想を持ち得なかったという伊波像に言及している。この伊波の言葉について、1933年「迎へほこら」という伊波の自作オモロ「露西亜とのくはらに／皇国す稜威まさたれ／みかない嵩みゆかかきで／おかけぶさへ聖代に／いきはてのおきなは」(伊波普猷「迎へほこら」(伊波普猷『古琉球』改版 p.369)を引き合いに出し、これが「日露戦争に対する伊波の批判回答とするのは早計」だと言う。「日本」国家を「沖縄」から根底的に問い糺す姿勢が弱かったのは、「異種としての沖縄人への切り返しが、たえず心の隅で予感されていたから」だと伊佐はその理由を説明している。(伊佐眞一『沖縄と日本の間で 伊波普猷・帝大卒論への道』(下) p.45)

12 伊波普猷「閑月日」『伊波普猷全集』第10巻 p.38]

した。社会主義的機関紙である『平民新聞』もこの頃にできた。1906年には初の合法的な社会主義政党である日本社会党を堺利彦らがつくった。さらにアメリカでアナルコサンディカリズムの影響を受けた幸徳の直接行動論と片山の主張した議会政策論をめぐる論争を経て、1910年に大逆事件で幸徳が検挙されて「冬の時代」を迎えた。ある意味、当時は社会主義及び共産主義思想にとって近代において最も自由な時代だったとすることもできる。

伊波普猷の「年譜」によると、片山潜の家に出入りしていた伊波の恩師・田島利三郎の影響で、「英文の『社会主義小史』を読む<sup>13</sup>」と記録されており、帝大の文科大学の学生として、市井を賑わせているこれらの思想を教養として取り入れていたのだろう。伊波にとってこの時点での興味はその程度だった。

伊波が言った「ユートピア」とは、1516年にトマス・モアが記した本のタイトルである。社会主義的な意味合いで使われる際には、初期社会主義者のフーリエやサン＝シモン、オウエンらの主張を「ユートピア社会主義」と呼ぶことがある。これは、エンゲルスが自らの社会主義を「科学的社会主義」と規定したことにより、乗り越えられるべきもの、または既に乗り越えたものとしてそのように呼ばれるようになった。そして、1900年代初頭には、マルクスやエンゲルスの主義・主張は成熟化し、前述のように日本でもあらゆる論客が現れていた。1917年には、その思想が体現化する形でソビエト連邦が誕生した。そういった状況であっても、伊波にはアリの社会にも満たない「ユートピア」であるとしか見えなかった。

13 「年譜」『伊波普猷全集』第11巻 p.539]

この時代に『社会主義小史』という書物が出版された記録は今のところ見つけられていない。同名の著書はジョージ・リヒトハイムが1979年に出版している。この「年譜」の典拠は、伊波が田島の著作の「序文」として1922年に書いた「田島先生の旧稿琉球語研究資料を出版するにあたって」で間違いないが、ここには次のように書かれている。「或時先生は片山氏から英文で書いた何かいふ人の社会主義小史を買つて来て、私に講義させて聴かれたこともあつた」。(伊波普猷「田島先生の旧稿琉球語研究資料を出版するにあたって」『伊波普猷全集』第10巻 p.308)

つまり、「年譜」と典拠となった文章を見比べてみると、伊波の書いた史実が「年譜」に書かれる際に読み違えられていることがわかる。「年譜」には『社会主義小史』と、あたかも書物の題であるかのように書かれているが、伊波の証言ではそれが果たして書物の題であったかを判断することはできないから。

非戦論や社会主義の議論が日本で勃興し始めた頃、例えば詩人の石川啄木はそれらに対して懐疑的だったが、幸徳秋水が大逆事件で検挙され、処刑された後の1911年には「ココアのひと匙」に、「はてしなき議論の後の冷めたるココアのひと匙を啜りて、そのうすがき舌触りに、われは知る、テロリストのかなしき、かなしき心を。」<sup>14</sup>と書いた。しかし、伊波は「幸徳秋水等は死を望めり、木下尚江氏の説の如く、彼を死刑に処すは国歌の為危険なり」<sup>15</sup>と語るにとどまり、特に自らの心情を語ることはなかった。

思想史的特徴の第三は、レイシズム的視点が含まれていることである。「世界の人類中には社会組織の点に於て蟻に及ばないのがゐる」として、「(一) アウストラリアの或土人 (二) 南亜米利加のテラデルフィゴの蛮人 (三) 阿非利加のブツシユマン (四) 中央亜米利加のチツゲルインヂヤン (五) 南亜米利加のチャコインヂヤン」<sup>16</sup>を挙げた。

伊佐の指摘によると、「これらの人類に関する知識の仕入先は、坪井の『人類学講義』(国光社、一九〇五年)、あるいは鳥居龍蔵の著書にもそのことが載っているから、東京帝大理科大学の人類学教室であることはまちがいな」<sup>17</sup>だった。伊波が自らの専攻である言語学教室だけでなく、分野を横断して人類学教室と深い関わりがあったことは周知の事実であり、そこで得たばかりの知識をここぞとばかりに『琉球新報』に投稿したのであろう。

1903年、大阪で開かれた内国勧業博覧会の学術人類館で、アイヌ民族、台湾高砂族、朝鮮民族、清国人、インド人、ジャワ人、ベンガル人、トルコ人、アフリカ先住民と並んで、琉球人として沖縄県の女性(遊女)二人が展示された。「人類館事件」である。これに対して、『琉球新報』は「同

14 石川啄木「ココアのひと匙」〔石川啄木『復刻版 呼子と口笛』p.7〕

15 比嘉春潮「大洋子の日録」〔『比嘉春潮全集』第5巻 p.214〕

16 伊波普猷「閑月日」〔『伊波普猷全集』第10巻 p.39〕

近代日本において、最初期の段階でレイシズム的視点を持ち、広く紹介したのは福沢諭吉だった。『掌中萬國一覽』(1869年)には、アングロサクソンから見た人種観を「私意を交へず」紹介した。世界の人種は「白哲人種」「黄色人種」「赤色人種」「黒色人種」「茶色人種」に大きく分かれ、例えば「白哲人種」は「容貌骨格都て美」で「文明の極度に達す可きの性」、「黒色人種」は「其體強壯にして活潑に事をなすべしと雖ども、性質懶惰にして開化進歩の味を知らず」というような紹介の仕方だった。(福沢諭吉「掌中萬國一覽」〔『福沢諭吉全集』第2巻 pp.462～463〕

17 伊佐前掲書 p.42

胞に対する侮辱(人類館)」(1903年4月7日)を皮切りに激しく紙面上で抗議した。これを書いたのは、主筆である太田朝敷だった。内容を要約すると、陳列された沖縄の住居や生活道具が「可成野蛮風」に見られてしまうこと、展示されたのが「賤業婦」だったこと、そしてこのような展示をされると「□覧者の目に映する沖縄ハ同列のアイヌ生蕃と大差」ないと思われる懸念があった<sup>18</sup>。

続く「人類館を中止せしめよ」(1903年4月11日)には、帝国における沖縄の位置を主張するあまり、周辺民族への蔑視感が強く表れた。「特に台湾の生蕃、北海のアイヌ等と共に本県人を撰みたるは、是れ我を生蕃アイヌ視したるものなり。我に対するの侮辱、豈これより大なるものあらんや」<sup>19</sup>という文章がそれである。

これが起こったとき、伊波は京都にある第三高等学校の学生だった。当時から沖縄のジャーナリズムに通じていた伊波は、この事件のことを知っていたはずだし、人類館の会場だった大阪はまでは、ほど遠くないから、実際に見に行ったかもしれない。だが伊波はこの人類館事件について、一言も言及することはなかった。

そのような侮辱を受けたにもかかわらず、伊波は他の世界の民族を「社会組織に於て蟻に及ばない」と断じた。否、沖縄人として、そのような侮辱を受け続けていたからこそかもしれない。沖縄の社会や人びとは、日本帝国や世界の中でも文化的に優れ、何も劣っていないという自負が伊波の中にも多分にあった。そのような想いは、他民族を下に見る考え方に結びついてしまった。

後に、帝大を卒業して、学者としての第一歩を踏み出した頃に書かれたいくつかの文章にもそれが表れている。帝大で習得した言語学の成果とそれを補完する形での沖縄人の出自や位置を示した「沖縄人の祖先に就て」では、「幸にして余が研究の結果は沖縄人が日本人たる資格はアイヌや西

18 「同胞に対する侮辱(人類館)」〔『琉球新報』1903年4月7日〕

この内容に関しては、本論で詳述するには大きすぎるテーマを孕んでいる。当時の帝国とその周辺の序列のこと、沖縄内部の女性特に遊女への蔑視、他の周辺民族への蔑視など、様々な問題を含んでいるのである。「生蕃」とは台湾先住民に対する蔑称。

19 「人類館を中止せしめよ」〔『琉球新報』1903年4月11日〕

蛮が日本人たる資格と自ら別物であることを教えた<sup>20</sup>」と書いた。「幸にして」という部分に、伊波の想いが吐露されているように見える。ここで伊波は人類館事件について特記してはいないが、自身の研究により、先ほど引用した『琉球新報』の事件に対する憤慨が杞憂であることを証明した気分だったかもしれない。

このような伊波の考え方は、近代日本の周縁に置かれた沖縄というひとつのマイノリティ集団に出自を持ち、ヤマト社会で学問を志していく若者が陥らざるを得ない思考様式であるとともに、現代に生きるわたくしたちは、この視点を正面から、また側面から冷静に見つめなければならないだろう。

## 参考文献・資料

伊佐真一『沖縄と日本の間で 伊波普猷・帝大卒論への道』(中) 琉球新報社 2016年  
伊佐真一『沖縄と日本の間で 伊波普猷・帝大卒論への道』(下) 琉球新報社 2016年  
石川啄木『復刻版 呼子と口笛』 盛岡啄木会 1975年  
伊波普猷、服部四郎、中曾根政善、外間守善『伊波普猷全集』第10・11巻 平凡社 1974～1976年  
伊波普猷『古琉球』初版 沖縄公論社 1911年  
伊波普猷『古琉球』改版 青磁社 1942年  
鹿野政直『沖縄の淵 伊波普猷とその時代』岩波書店 1993年  
比嘉春潮『比嘉春潮全集』第5巻 沖縄タイムス社 1973年  
福沢諭吉『文明論之概略』岩波文庫 1995年  
福沢諭吉『福沢諭吉全集』第2巻 岩波書店 1959年  
『琉球新報』(戦前期)

20 伊波普猷「沖縄人の祖先に就て」『琉球新報』1906年12月9日

## 研究ノート

# 学生・伊波普猷が捉えた人間とアリの社会 (その2)

竹内太郎 九州大学大学院地球社会統合科学府博士後期課程  
村上貴弘 九州大学持続可能な社会のための決断科学センター

## 3 アリの社会と伊波普猷の見た人間社会 (村上)

沖縄出身の学者・伊波普猷が残したエッセイにアリのことを触れたものがある。1905年に書かれたもので、当時伊波は東京帝国大学文学部に所属する学生であった。『琉球新報』に寄稿された原稿を今回初めて読んだのだが、アリに関する記述が非常に正確で、かつ幅広いことに驚かされた。どのようなことが記述されているかを要約してみよう。

- (1) アリの社会はほとんど完全な社会組織を持っている。
- (2) 女王アリ、オスアリ、ワーカー、兵隊アリの4つのカーストに別れている。
- (3) 結婚飛行をし、交尾後オスは死に、女王アリはワーカーに手助けされながら新たな巣を作る。
- (4) 分巢し、新たなコロニーを形成する。
- (5) 人間の社会進化段階に遊牧、農耕、商工時代があるようにアリに